



C1グランプリ2026 出陣式(4月6日)

CONTENTS

- C1グランプリ2026 公式ガイド
- アクティビ理事長がゆく
- インタビュー
 - ・ 統括施設長
 - ・ 介護旅行
 - ・ 施設長推薦スタッフ
- グループ企画
- ちとせ便り
 - ・ 入職式
 - ・ 介護甲子園復活
 - ・ ガーデンちとせ三山園開設



C1グランプリ2025 最優秀賞のちとせ小町

C1グランプリ²⁰²⁶

2026年5月16日(土)
13:30～16:00 予定 (受付開始13:00)
東京ウィメンズプラザホール

今年のテーマ
『変化』



主 催：社会福祉法人千歳会
特設サイト：<https://c1.1000.or.jp/2026c1/>
司 会 進 行：町 亞星 (元日本テレビアナウンサー)
審 査 員：熊谷 大輔 (昭和女子大学 福祉社会・経営研究科 福祉共創マネジメント専攻 人間社会学部福祉社会学科 准教授)
青木 太志 (介護ニュース Joint 編集長)
山本 英清 (千葉県国民健康保険連合会 介護保険課 相談員)

5月16日(土)、「C1グランプリ2026」が東京ウィメンズプラザホール(渋谷区神宮前)で開催されます。C1グランプリは、現場で働く職員一人ひとりの挑戦・想い・専門性に光を当て、成長を実感できる場として位置づけられており、2022年に第1回大会を開催、今回で第5回となります。

団塊の世代(約800万人)が全員75歳以上の後期高齢者となり、人口の5人に1人が75歳以上という超高齢社会を迎え、介護人材の確保やサービスの質向上が社会的課題となる中、現場から生まれる「実践知」を共有し合う重要性はますます高まっています。

職員が自らの実践や挑戦を言語化して発信することで、職員同士の学び合いによるケアの質向上、介護職としての誇りと専門性の再認識によるモチベーション向上、千歳会の実践力・組織力の法人内外への発信を目的としています。

第5回となる今回は『変化』をテーマとし、まず1次予選で15事業所から10事業所を選出。続く2次

開催目的

- ・現場職員が自らの実践や挑戦を言語化・発信する機会をつくる
- ・介護職としての誇りと専門性を再認識し、モチベーション向上につなげる
- ・法人内外に千歳会の実践力・組織力を発信する
- ・学び合いを通じて、ケアの質向上に寄与する

スケジュール

15 事業所

1次予選：エントリーシート提出

第三者による審査員選考

提出期限 2026年3月6日(金)

結果発表 2026年3月13日(金)

10 事業所

2次予選：ビデオ映像（ネット公開）

公式サイトでの国民投票数による選考

動画提出期限	2026年3月20日(金)
ネット投票期間	2026年3月25日(水)～ 2026年3月31日(火)
結果発表	2026年4月2日(木)

出陣式

2026年4月6日(月)

決勝大会：プレゼンテーション

2026年5月16日(土)

5 事業所



予選ではC1グランプリ特設サイトで各事業所が1分超の映像を公開し、ネット投票による選考を行って、晴れて5事業所が決勝大会進出となりました。

決勝進出の5事業所は、登壇順に以下のとおり。

- ・訪問介護ステーションちとせ「チャールストン」
- ・特別養護老人ホーム三山園
- ・特別養護老人ホームちとせ稲毛
- ・特別養護老人ホームちとせ北本
- ・特別養護老人ホームちとせ小町

また、決勝進出事業所には、それぞれ別の施設の施設長がサポーターに就き、発表内容の制作をサポートしていきます。

大会当日は、各事業所が制作した映像やスライドを使用して約15分のプレゼンテーションを行い、審査委員の投票により「最も学びと気づきを与えた事業所」が最優秀賞に選ばれます。各事業所の知見と挑戦が一堂に会する貴重な機会です。新たな発見や気づきが、皆様の業務や未来につながるきっかけとなるでしょう。

「変化に寄り添う」チームケアの力

訪問介護が支える在宅生活の24時間

登壇者 太田 伸江 谷口 ひとみ 村田 祐子

訪問介護の現場では、利用者の加齢や病状によって心身の状態が少しずつ変化していく。その「変化」に気づき、一人ひとりに合わせた支援を柔軟に提供していくことが求められる。訪問介護ステーションちとせでは、職員同士が密に連携し、チーム全体で利用者の変化に寄り添う姿勢を何よりも大切にしている。

その成果が表れたのが、うつ傾向が強くなり、自宅に引きこもりがちだった方のケースだ。当初は家の中が散らかり、買い物同行の提案にも全く応じてもらえなかった。しかし、決して無理強いをせず、ご本人の精神状態を見極めながら「お天気がいいから、気分転換に少し外に出ませんか」など声かけの工夫を重ねた。根気強いアプローチの結果、今では外出を心待ちにするまでに回復し、見違えるように安定した生活を送っているという。

こうした回復の背景には、チームケアの強みがある。特定の職員が一人で抱え込むのではなく、複数の視点で利用者を見守ることで、「先週

はできたことが今日ではできない」といった些細な変化にいち早く気づくことができる。また、職員間で頻繁に情報共有を行い、負担を分散させることで、心にゆとりを持った質の高い支援へとつながっている。現場では「何か手伝えることはありませんか?」と自然に助け合う声飛び交い、全員が真摯に仕事と向き合う環境が築かれている。

一方で、現場ならではのジレンマもある。介護保険制度には利用できる単位数に上限があり、訪問介護が介入できるのは、1日のうちわずか1時間程度にすぎない。管理者の沼上麻衣子さんは「私たちが帰った後の『残りの23時間』を、いかに安全に過ごしてもらうかが重要」と語る。物の配置を工夫し、一人でも水分や食事が摂れるよう準備するなど、限られた時間の中で最大限の努力を尽くしている。

「住み慣れた家にいたい」というお客様の切実な思いに応えるため、時間の調整を重ね、困難な依頼も可能な限り受け入れている。今後

も事業所全体で技術を高め、より多くのお客様を支えていく方針だ。制度の壁にぶつかりながらも、一丸となって利用者の生活を守り抜く真摯な姿勢は、まさに介護の原点と言えるだろう。



C1 に向けて会議中の皆さん



管理者の沼上麻衣子さん

皆誰しも一人ではない 三山園の变革と支援のかたち

登壇者 日賀野 啓代 久保田 湧 タバ ビサル チェベグドルジ アリウンチメグ

監督者 小林 みか

他法人が運営していた三山園を千歳会が引き継ぎ、ゼロからのスタートを切って1年。千歳会の基準まで引き上げる道のりの中で、三山園は組織や業務、そしてケアのあり方において大きな変革を遂げてきた。

運営開始当初、千歳会からの異動職員と旧施設の職員は半々の体制だった。以前からの職員には「千歳会では」と他人事のように捉える姿勢も見られ、新しい方針に適應できず何度も協議を重ねた。しかし、「お客様のために動く」という理念を地道に浸透させることで、徐々に同一の考えを持てる職員が増えていった。

同時に業務のICT化も推進し、情報共有をスムーズにしたことで、職員一人ひとりがお客様と向き合う時間を確保できるようになった。また、夜間の看護師配置を見直して介護職中心へ移行し、緊急時は24時間体制の往診医と連携することで、日中の看護体制を手厚くする等の改革も実現した。菅原施設長が「今では職員自らが話し合い、提

案してくれるようになった」と語る
とおり、指示待ちから自律したチームへと確かな成長を遂げている。

チームの成長は、お客様へのケアにも明確に表れている。例えば、家族からの虐待で措置入所されたお客様に対しては、後見人を選定し職員立会いのもとで家族との関係修復を支援。少しずつ距離を縮めることで、今では互いの様子を分かち合えるまでに改善した。

また、身寄りがなく他施設で入居を断られた独居の方に対しては、相談員やケアマネジャーが関係機関と粘り強く連携した。かつての友人を探し出して保証人を依頼し、施設内での対応を約束して面会につなげたことで、お客様の表情が劇的に明るくなった。現場の介護・看護職を含めた諦めないコミュニケーションが、孤立していたお客様を救ったのだ。今後もすべてのお客様が他者との接点を持てるよう挑戦を続けていく。

こうした1年間の軌跡を胸にステージに立つ職員たちに向け、菅原施設長は「責任は私が取るから思

い切ってやってほしい。この経験は必ず自信になり、どこへ行っても活躍できる人材への成長につながる」と背中を押す。チーム一丸で困難を乗り越えた三山園が語る「変化の軌跡」と、今後の飛躍に大いに期待したい。



一人ひとりと向き合う



食事介助の時間

リスクを恐れず「開かれた施設」へ ちとせ稲毛が挑む変化と挑戦

登壇者 平野 智仁 中澤 学 今村 千香子 エルサ エルパニア

ちとせ稲毛では、今回のテーマである「変化」に対し、リスクマネジメントと地域交流を掛け合わせ、「会えない施設から選ばれる施設へ」という思いを掲げる。

その象徴ともいえるのが、「面会制限の大幅な緩和だ。ちとせ稲毛はコロナ禍での開設であったため、以前は時間制限や事前予約が必要だったが、現在は午前10時から夜8時まで、予約不要・時間制限なしの「面会フリー」を実施している。

入居されているお客様ご本人にとって、ご家族との交流は一番大切な時間である。感染症のリスクは当然あるが、それを理由に扉を閉ざすのではなく、知識を持って正しく対応することによってお客様とご家族との時間を大切にしたいと考え、行動に移したのだ。未だに面会制限が厳しい施設も多い中、この決断はご家族から大変好評を得ている。

現場の職員にとっては、当初「どう対応していいかわからない」という戸惑いもあった。しかし、今回登壇の一人、今村千香子さんは「ご家

族と顔なじみになり、深い関わりができるようになりました。施設内に温かい時間が増え、今では職員もご家族にお会いできるのを楽しみにしています」と笑顔を見せる。ご家族という「第三者の目」が入ることで、日々のこまめな清掃や些細な体調変化の報告など、ケアの質や情報共有の意識も大きく向上したという。

さらに、ちとせ稲毛の変化は施設内に留まらない。地域に愛される施設を目指し、2026年1月より毎月「ちとせ食堂（子ども食堂、地域食堂）」を開催しているほか、夏祭りなどのイベントで積極的に地域住民を招き入れている。トップダウンではなく、現場職員からの自発的な提案で進むこれらの取り組みは、閉鎖的な介護施設のイメージを刷新し、地域との強固な絆を育んでいる。

今回のC1グランプリへの意気込みを尋ねると、過去2回の出場で悔し涙を飲んできた今村さんは「3度目の正直で今回こそ絶対に優勝を取りたいです。リスクを乗り越え、ちとせ稲毛が一丸となって成長し、

変化できた姿を全力で伝えます」と力強く語ってくれた。リスクを恐れず、開かれた施設へと歩み続けるちとせ稲毛の挑戦から目が離せない。



お客様とにこやかに交流



排泄サポートリフト体験

最期まで「自分らしい暮らし」を 看取りケアとユニットケアの融合を目指して

登壇者 村田 美千代 吉田 望花 外當 武史 ヴ-ティ ハオ

介護施設における看取りケアとは、人生の最期だけを看取るものではない。入居前からの人生そのものをサポートし、その人が大切にしてきた生活を継続することが、より良い看取りケアにつながる。その理念を実現するため、ちとせ北本ではユニットケアの推進と、ユニットケアリーダー実地研修施設の認定に向けた取り組みを進めている。

ユニットケアの最大の目的は、施設を「集団生活の場」ではなく、「自宅と同じように過ごせる場所」にすることだ。その具体的な取り組みの一つが、生活パターンの個別化である。従来は決められた時間に全員を一齐に起床させ、同じ量の食事を提供していた。しかし現在では、本人の起きたい時間に起き、食べた時間に食事をするスタイルへと移行している。食事の量や好みも一人ひとりに合わせ、お腹が空いたときのために冷蔵庫にはおにぎりなどの補食も常備するようになった。結果として残食が減り、お客様の満足度も大きく向上しているという。さら

に「お刺身が食べたい」「にしんそばが食べたい」といった個別の願いを叶えることで、お客様だけでなくご家族にも大変喜ばれている。

また、環境づくりにも力を入れている。ユニットの入口を家の玄関のように装飾し、外出と帰宅のメリハリをつけるとともに、認知症のお客様に「ここが自分の家だ」と安心してもらうための工夫を凝らしている。さらに、車いすから柔らかいソファに座り替えてくつろげる時間も設けた。

こうした個別ケアへの転換には、職員の意識改革が不可欠である。研修で「動けずにただ座り続ける」というお客様の立場を疑似体験した職員は、こまめな声掛けや姿勢を変える支援の重要性を痛感した。もちろん個別対応が増えることで、職員間の足並みを揃えることに苦慮する場面もある。しかし、好みの食事を完食し、笑顔を見せるお客様の姿は、職員にとって何よりの喜びとやりがいになっている。

看取りは、生活の延長にある。

馴染みの職員や仲間に関われ、最期までその人らしく過ごせる空間をつくるため、施設全体での試行錯誤と挑戦は続いていく。



ユニットの入口を玄関風に装飾



ご希望に合わせてご飯の量を調整

「分かっているつもり」からの脱却 思いを形にするユニットケアへの挑戦

登壇者 高木 渉 遠藤 美佳 井上 久美子 渡邊 薫 三島 星来 田中 健志

決められた時間に起床し、一斉に食事をとる。多くの介護施設で見られる光景だが、それは入居者ではなく施設側の都合に合わせたケアでもある。同施設でも長らく、本来のユニットケアを十分に実践できていない現状があった。

転機が訪れたきっかけは、職員たちが研修を通じてあるモデル施設を見学したことだ。そこでは、入居者が自宅にいた頃と同じような暮らしの継続が実現されていた。「ここは病院ではなく、おうち(家)なのだ」という実践に触れ、職員たちは大きな衝撃を受けたという。「自分たちも本当のユニットケアをやりたい」。その熱い思いから、2025年4月にユニットケア推進委員会を発足した。

まず取り組んだのは、職員自身による「お客様体験」だ。例えば、日常的に提供していたミキサー食(ペースト食)の試食。「実際に食べてみると、何を食べているか分からず美味しくない。お客様が残してしまふ理由が身をもって理解できた」と職員は振り返る。他にも、ベッド

の背上げによる圧迫感やおむつの着用などを体験し、介助される側の苦痛や不快感をゼロから学び直した。

この気づきは、現場に具体的な変化をもたらした。「歯があるのになぜミキサー食なのか」という疑問から、協力歯科医や管理栄養士との連携を強化。月に一度の回診に現場の職員も同行し、テーブルの高さや食事の姿勢を見直しながら、少しずつ常食へと近づけていった。

結果、飲み込むだけだったお客様が自分で噛んで食べられるようになり、笑顔で「ありがとう」と声をかけてくれる機会が増加。お客様の自発性や活気も引き出されているという。

また、課題だった看護師ら他職種との連携も、現場での相談が増えたことで大きく改善した。ケアの方針に迷ったときは、立ち返るべき物差しとして施設の「理念」を確認し合うようになり、現在は毎朝の朝礼で理念の唱和を行っている。

同施設が目指す真のユニットケアの実現には、まだ時間がかかるかも

しれない。しかし、日常の小さな気づきをすくい上げ、職員の「思いを形に」していく確かな一歩は、入居者一人ひとりの豊かな人生を支える未来へと着実につながっている。

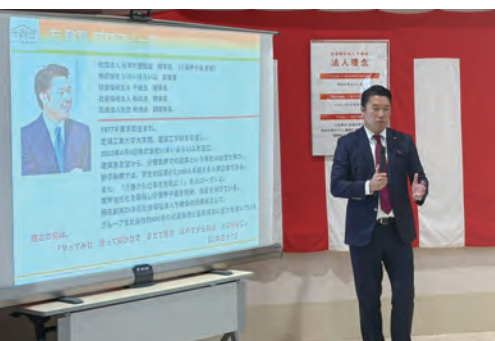


食事体験研修



ベッドギャッチ体験研修

2026年の 日本医療福祉グループ



社会福祉法人 千歳会 理事長
一般社団法人 日本介護協会 理事長

ひだり ひろ まさ
左 敬 真

千歳会は現在、300人を超える職員数になりました。今年度は新規事業として障がい者事業、グループホームや放課後等デイサービスなど、障がいのある方たちもお客様として我々は考えていかなければなりません。

「年を重ねていくその先に介護が必要ならば」ということで千歳会を運営していますが、皆さんが結婚しお子さんができて、そこに先天性やあるいは事故などで障がいがあるとすると、介護を「人生のインフラ業」として捉える我々としては、福祉として障がい者事業も必要かなと思っています。

障がいのある方たちを見守っているお父さんお母さん、あるいは家族が高齢者になり、障がい者の方も高齢者になると、介護サービスを受けることになります。そうになると、やはり0歳から最期を迎えるまでですべてを、我々千歳会がインフラとして、お客様の人生を支えていければと思っています。今回、定款変更とともに、障がい者事業のスタートを切っています。

そしてこれから各事業を円滑に進めていくため、グループ全体をまとめていこうと考え、千歳会の上に「社会福祉連携推進法人 日本医療福祉グループ」を設立いたしました。

社会福祉連携推進法人は、各法人が個々で戦うのではなく、複数の社会福祉法人が集まって一つの法人を形成していくという考え方になっており、各法人の良さは残しつつ、人材の確保・育成・共有による事務の軽減、経営の効率化を図ることを目的としています。

千歳会や医療法人・社会福祉法人はその傘下に入り、社会福祉連携推進法人という立場で、これからグループ全体を統括してまいります。事務軽減で生産性を上げながら、未来へつなげられるようにできればと思います、今年はその法人を中心に回していきたいと思っています。

また、今後は農業法人をやりたいと考えています。今、日本給食サービズ(株)と組んでいろいろと厨房の要望を伝えながらお客様の食事の改善をしています。口に入る食事の自立支援という場面では、抗酸化(作

社会福祉連携推進法人 日本医療福祉グループ

社員法人

社会福祉法人 千歳会
社会福祉法人 敬成会

賛助法人

医療法人社団 敬徳会
医療法人社団 活生会
日本給食サービス株式会社
ジャパンワークアドバンス株式会社

用が期待できる）野菜などの食べるもの。つまり一次産業の中で、我々が食するものも健康維持の中でいろいろ考えていきたいと思っています。これについては、日本給食サービスと協議しながら、一つずつチャンスを作っていきたいと思っています。

そこで職員の中に「農業も興味あるよ」とか「障がい者事業にも興味あるよ」という方は、この機会に手を挙げてチャンスをつかんでもらいたいなど思っています。介護だけではなく、いろいろチャレンジしていきたいと思っていますので、「あの話どこに行きましたか?」とか「あの話なんですか?」と上司や我々に伝えてもらえれば検討いたします。

その中で「では千歳会全体はどうするのか?」という、サービスの内容をですね。一昨年から「食べる喜びを諦めない」「旅行する喜びを諦めない」「社会との接点の喜びを諦めない」という3つの諦めないを方針としましたが、この2年間の皆さんの取り組みの中で、お客様から評価や期待をいただいています。私も各施設を回って講義・講話という立場で2時間ほどお客様とお話していますが、3つの諦めないはすごく支持をいただいています。

その上にもう一つ、「予防介護」という場面をより強くしたいと考えています。食べる・旅行する・社会とつながる、その前提は健康管理と

健康維持、予防の介護という場面がすごく重要であり、3つの諦めないという目標を達成するために、そこに機能訓練のメンバーや相談員のソーシャルワークという立場が出てきます。未来予測の中で先回りをして、お客様たちの健康をどうやって最低でも維持していくのか、そしてゆっくりとなだらかに年をとっていくという、その場面を作っていくたい。千歳会はステージが一個上がったと思っていますので、改めて皆さんの中に新しいエッセンスを入れていただきたいと思っています。

また、顧客と職員の増加により独自の商圈が形成される中、今後は調剤事業の展開も検討しています。また、日本給食サービスと連携し、お客様やご家族、地域の介護を下支えする「宅食」など、食の健康を通じた新たなサービスにも挑戦したいと考えています。改めて皆さんの力は「現場力」をしっかりと培っていただきまして、我々法人全体が未来を創っていききたいと思っています。

まずは皆さんの健康を留意してい

ただ、それから皆さんの活力をお客様に向けて、情熱あるサービスを提供していただきたいと思っています。私もしっかり健康管理しながら皆さんを導いていきますので、お客様の笑顔のためにどうぞよろしくお願いいたします。



頼りになる高坂統括

統括の仕事内容と役割と今後の展望

千歳会での私の役割、そしてこれからの展望について、統括施設長という立場から個人の考えとしてお話をさせていただきます。

私が介護の世界に飛び込んでから、早いもので四半世紀が経ちました。千歳会に入職してから約5年、現在は統括施設長として法人内の各拠点をつなぐ役割を担っています。

私の仕事をひとことで表現するならば、「調整係」というのがしっくりきます。理事長が描くビジョンや方向性を現場に伝え、逆に現場で起きている課題や職員の声を本部に吸い上げる。上と下、そして横のつながりを円滑にするためのパイプ役です。

今はデジタルの時代で、Web会議なども普及していますが、私は「対面」で話すことも大事だと思っています。特に人間関係の悩みや込み入った相談は、「画面越しでは空気が伝わりません。だからこそ、

私はフットワーク軽く各施設へ足を運び、膝を突き合わせて話をすることを大切に行っています。相手が安心して話せる場を作ること、それが信頼関係の第一歩だと信じているからです。

現在の千歳会を一言で表すなら「勢いがある」法人と思っています。拠点は増え、拠点ごとに新しい取り組みも展開し、組織として前へ前へと進んでいます。しかし、急激な拡大に対して、人材の育成や組織の地盤固めが追いついていない部分があるのも事実です。これからは、ただ前に進むだけでなく、組織を「太く」し、安定感を増していくことが私の、そして法人の課題だと認識しています。

統括として私が心がけているのは、各施設長の「色」を消さないことです。「統括や本部が言ったからやる」のではなく、施設長自身が考え、納得して動いてほしい、私

は彼らが動けるようにそれをサポートする。私はあくまで黒子であり、主役は現場の彼らです。

また、法人内での「横の連携」も強化していきたいと考えています。ある施設で起きたトラブルや解決策は、他の施設にとっても貴重な財産です。情報を共有し、困ったときはお互いに「そっちはどうしている？」と聞き合える関係性を築く。そうした風通しの良さが、組織全体の底上げにつながると確信しています。

変化を恐れず、 まずはやってみよう

私は、介護職を真のプロフェッショナルな仕事だと考えています。国家資格でありながら、社会的地位や認知度はまだ十分とは言えません。だからこそ、千歳会で働く職員には、自分たちの仕事に誇りを持ってほしい。

「千歳会」という名前が、良い意味で地域や業界内で一人歩きするような、そんなブランド力のある法人にしていきたいのです。「あそこの

法人は面白いことをやっている」「活気がある」と外部から評価されることは、中で働く職員の自信にもつながります。

私の目標は、与えられた役割を全うし、次世代が育つ土壌を作ること。そして、自走できる強い組織を作ることです。

変化を恐れず、まずはやってみる。失敗してもそこから学ばばいい。そんな前向きな空気を法人全体に広げながら、これからも現場と共に走り続けていきたいと思えます。



理事 統括施設長
高坂 忍

旅行する喜びを諦めないために ～千歳会「介護旅行」の流儀～



法人本部員
明石 勇



私が千歳会で介護旅行に携わるようになったのは、旅行業界の変化がきっかけでした。ネット予約が主流となり、旅行会社が衰退していく中で、「人の手でしか手配できない分野」として残されたのが介護旅行でした。縁あって理事長と出会い、旅行に対する想いに共感していただき、千歳会での取り組みが始まりました。

最初は現場を知るため、ケアハウスで職員として働きました。そこで見たのは、施設内で完結してしまう日常です。もっと外の世界に触れてほしい——そう考えて企画した第一回目は、両国へのツアーでした。ちゃんこ鍋を食べ、相撲部屋や吉良上野介跡を巡る。車窓からの景色だけでも、皆様の目が輝くのが分かりました。「外に出る喜び」を再確認した瞬間でした。

その後、コロナ禍による数年の中断を経て、私たちは改めて「第一回」として介護旅行を再開しました。現在は施設の数も増えたため、千葉エリアと埼玉・東京エリアを分け、移動の負担を減らす工夫を凝らした

がら、毎月実施しています。

「不安」を消すための 徹底した下調べ

「トラブルが心配ではないですか？」と聞かれることがあります。不安はありません。なぜなら、不安がなくなるまで徹底的に下調べをするからです。

現地の多目的トイレの有無はもちろん、お店になくても近くの駐車場にあるか、段差の回避ルートはどうなっているか、車いすから降りて座席に移れる方は何名いるか。これらをすべて事前に確認し、シミュレーションを行います。私が不安を抱えたままでは、それがお客様にも伝わってしまいます。皆様が安心して楽しめるよう、黒子としての準備は一切の手抜きをしません。

車両手配もパズルのようなものです。リフト付きバスの手配から、参加者の状態に合わせた介護タクシーの組み合わせまで、出発の2週間前に名簿が確定してから、最適な移動手段を組み上げます。これも画



埼玉旅行では老舗のうなぎ店「うらわのうなぎ 萬店」へ
(2025年8・9月)



栃木で宇都宮餃子館と道の駅散策
(2025年5月)

一的な年間計画では対応しきれない、細やかな調整が必要な部分です。

「年間の旅行計画をあらかじめ提示してほしい」と求められることがあります。確かに、運営側からすればそのほうが効率的かもしれませんが。しかし、私はあえて年間予定をガチガチに決めない方針を貫いています。なぜなら、参加されるお客様の「想い」は生き物だからです。

例えば、ある場所へ行った直後に「すごく良かったからもう一度行きたい」「私も連れて行って」という声が上がることがあります。高齢の方々にとって、「来年また行きましょう」という約束は、あまりに気が遠くなる話です。「行きたい」という熱量があるうちに、柔軟に次の企画に組み込む。それが私のやり方です。また、費用の問題もあります。豪華な食事付きで1万円かかるプランもあれば、昼食設定なし・近場の見学のみの2、3千円で済むプランもあります。誰もが参加できる機会を作るには、その都度バランスを見ながら企画を練り上げる必要があるのです。効率よりも、参加者

の「今」に寄り添うこと。これこそが、私が介護旅行で最も大切にしていることです。

これからの課題 想いを継ぐチームづくり

現在、企画から下見、幹旋、当日の添乗、精算に至るまで、この業務のほとんどを私一人で行っています。しかし、私もまた高齢者の入り口に立っています。いつまでも先頭を走って、「ごちだよ！」と案内し続けることはできません。

理事長は、介護旅行を法人の柱の一つと考えてくださっています。だからこそ、このノウハウを属人的なもので終わらせず、次世代に引き継いでいかなければなりません。現場の業務も多忙だとは思いますが、事務方や意欲のある職員と連携し、チームとしてこの事業を動かしていく体制づくりが急務です。

施設に入ったからといって、旅をあきらめる必要はありません。「また行きたいね」と笑い合える時間を、一人でも多くの方に届けるために私

はこれからも、皆様の声に耳を傾けながら、次の目的地を探し続けます。



茨城・大洗でお寿司をいただきました
(2025年12月)

介護旅行 スタッフ募集!

日々の業務に新しい風を吹き込みませんか？
介護旅行の運営スタッフを公募します。

千歳会の介護旅行では、単なる付き添いだけでなく、リスクマネジメントを含めた計画立案から実行までを、意思決定と実行のスピードを重視し、2～3名の少人数体制で行います。

施設外でのケアは、予期せぬ事態への対応力や、多職種との連携力が養われる絶好の機会です。いつもの業務とは違う視点を持ちたい方、自身のスキルアップを目指したい方のご応募をお待ちしています。

- ミーティング：月1～2回程度
(勤務時間内調整可)
- 対象：全職種
(介護・看護・リハビリ・相談員など)
- 問い合わせ：法人本部 明石 まで

施設長推薦スタッフ

特別養護老人ホーム
ちとせ稲毛

生活相談員

平野 智仁

「現場を知る」強みを活かして
地域の皆様と施設をつなぐ架け橋に

現在は主にシヨートステイの担当として、入退所の調整やご家族・ケアマネジャー様との連絡調整など、施設の内と外をつなぐ「窓口」の役割を担っています。

私は大学で社会福祉士の資格を取得しましたが、「現場を知らない人間に相談はできない」と感じ、卒業後すぐに相談員にはならず、前職では約6年半、介護職員として現場経験を積みました。夜勤やユニットリーダーとして培った経験があるからこそ、ご家族の不安に実感を込めて寄り添い、現場スタッフとも現実的な連携ができると自負しています。

シヨートステイは、ご自宅から離れて過ごす「ホテル」のようなサービスです。当施設では特養の空床を柔軟に活用しており、急なニーズにも対応しやすいのが強みです。しかし、ただお部屋があれば良いわけではありません。お客様の状況と現場の受け入れ態勢をマッチングさせ、安全



で快適な時間を過ごしていただくことが私の使命です。

時にはご家族と現場の板挟みになり、お叱りを受けることもありですが、現場の忙しきやリスクを肌で理解しているからこそ、できないことは正直にその理由を伝え、できることは最大限調整する。その誠実な擦り合わせこそが、本当の信頼関係を築くと信じています。

性格的には、あまりシリアスになりすぎず、時には冗談を交えて笑顔を引き出すようなコミュニケーションを心がけています。初めての場所で不安を抱えるお客様やご家族様に、「この人なら話しやすい」と思っていたただける空気感を作ることが、「施設の顔」としての私の役割だと感じているからです。

当施設はまだ新しいですが、面会時間の拡大や介護旅行、子ども食堂など、既存の枠にとらわれない挑戦を続けています。「平野になら何でも話せる」と思っていただけで、これからは地域と施設をつなぐ架け橋として、皆様に頼られる存在を目指します。どんな些細なことでも、ぜひお気軽にご相談ください。

特別養護老人ホーム
ちとせ北本

看護主任

豊永 麻美

その人らしい暮らしの延長線上にある
ハッピーエンドを求めて

私が看護師を志した原点は、17歳の時に感銘を受けたマザー・テレサの「死を待つ人の家」です。最期の瞬間までその人らしく生き抜くことを支えたい。その想いを胸に、大病院の緩和ケアチームなどで経験を積んできましたが、治療優先の場では限界も感じていました。そうした中でたどり着いたのが、ちとせ北本でした。

ここで出会ったユニットケアの理念は、私にとつて衝撃でした。暮らしの継続、つまり施設に入居してもこれまでの生活習慣や大切にしてきたものを変えずに暮らすこと。これは私が追い求めていたホスピスケアの理想そのものだったのです。

私たちは今、アドバンス・ケア・プランニング（ACP：人生会議）に力を入れています。ご家族だけでなく、ご本人に「何を大切に生きてこられたか」「最期はどうありたいか」を丁寧に伺い、スタッフ全員でその想いを支えること。それが、その人らしい人生のハッピーエンドにつながると思信じています。

例えば、食事が喉を通らなくなっても、お部屋で大好きな焼き芋を焼いて香りを楽しんでいただいたり、元校長先生だったお客様には、職員やその家族に向けて平和に関する講演会を開いていただき、教育者としての「役割」を全うしていただきました。

亡くなられた後も、私たちは変わりが亡くなられた際は、ご遺体とご家族と一緒に飾り付けを見て回りました。ご家族が故人の思い出話に花を咲かせ、涙ながらに喜んでくださる姿こそが、私たちの原動力です。

「心臓が止まれば終わり」ではありません。その方の人生の物語、大切にしてきた想いは、ご家族や私たちの中に生き続けます。現在、当施設は、ユニットケアリーダー研修施設を目指しています。施設に入っても、その人らしい暮らしの延長線上に「ハッピーエンド」がある。そんなケアをここから地域へ、そして多くの施設へと広げていきたいと願っています。



特別養護老人ホーム ちとせ小町



介護主任
六戸 智子

たった一言の「ありがとう」が一生の宝物になる。私が介護を続ける理由

私は現在、介護主任として現場に入りながら、相談員業務や職員管理など幅広い業務に携わっています。常に念頭に置いているのは、「一人ひとりの人生を豊かに」という当施設の理念です。迷ったときや落ち込んだときは、いつもこの原点に立ち返るようにしています。

現在の介護の現場では、職員の育成が大きな役割の一つです。特に近年は外国人スタッフが増えていますが、当施設で初めて受け入れた方は当初周囲から孤立し、反発ばかりしていました。そこで私は彼を自分のユニットに招き入れ、他の職員も巻き込んで根気よくコミュニケーションを取



り続けました。すると約1年後、彼は見違えるように笑顔を見せ、周囲と冗談を言い合い、お客様のケアについて自らの意見をしっかりと伝えてくれるまでに成長したのです。彼の姿は私の大きな喜びとなり、現在の外国人向け勉強会を立ち上げる原動力となりました。

介護は日々勉強が必要な奥深い仕事ですが、他では得られないほどの大きな感動を得られます。かつて私が担当した認知症のお客様は、私の名前を覚えてくださらず、いつも「あの姉ちゃん」などと呼んでいました。しかし、ある夜勤の日に急変され、救急搬送することになった際、その方がふと「六戸さん、ありがとうね」と、初めて私の名前を呼んでくださりました。残念なことに、その方はその後すぐにお亡くなりになりましたが、あの「本当のありがとう」は、この仕事を選んで本当に良かったと心底思えた瞬間でした。

介護という仕事は、毎日をただ淡々と過ごせるようなものではなく、小さな変化に気づき、考えて行動することが求められますし、学ぶべきことは尽きません。しかし、その学びが結果に結びついたときの嬉しさは格別で、すぐに結果は出なくとも、人と深く関わり、感謝をいただける素晴らしい仕事です。

これからも初心を忘れず、職員たちとともに成長し続けながら、皆様の人生を豊かにするケアを追求していきたいと思っています。

特別養護老人ホーム 三山園



管理栄養士
久保田 湧

140食の責任とやりがい、現場の声に寄り添う管理栄養士を目指して

私は山形県天童市の出身で、入社1年目の管理栄養士として、厨房業務全般の管理や他職種との連携業務を担っています。昼食時には約140食を提供する大規模な施設のため、文字どおり現場を走り回る毎日を過ごしています。

入職してすぐに直面したのは、想像以上にシビアな現場の現実でした。大規模な提供数に加え、完調品（完全調理済み食品）を活用する新システムへ移行した時期でもありました。長く入居されている方から「以前より味が落ちた」という厳しいお声をいただくこともあり、既製品と手作りのギャップにいかにか折り合いをつけるか、日々悩み続けました。

厨房はまさに体力勝負で、一日中立ちっぱなしの日もありますが、それでもお客様からの「美味しかったよ」という言葉が、何よりの原動力となっています。この1年で特に注力したのは、限られた人員と時間の中で食事の質を上げることです。麺やパンなどの特別メニューを導入して変化

をつけたり、個々の嚥下機能に合わせたきめ細かな調整を行ったりと、現場で試行錯誤を重ねました。

また、福利厚生の一環として「職員食」の導入・安定化も完遂しました。近隣にお店が少ない環境下で、特に買い出しが大変な海外出身スタッフの食生活を支えることができ、これは一つの成果だと感じています。そして外国人技能実習生を含む多様なスタッフと密にコミュニケーションを取り、チーム一丸となって食を提供する体制を作れたことは、大きな自信につながっています。

まだ試行錯誤の連続ですが、目指すのはあくまで「毎日おいしく、安全な食事」の提供です。今後は他拠点の取り組みも学びながら、管理栄養士として、そして一人の人間として、より広い視野で食のケアを担えるよう成長していきたいと思っています。



デイサービスセンター ちとせ



生活相談員
門谷 あゆみ

「楽しかったわ」が二番のやりがい、仲間とつくる魅力あふれるデイサービス

千歳会に入職して3年半になります。5人の子どもを育てながら、まったくの未経験から介護の世界に飛び込みました。最初はケアハウスに配属され、その後デイサービスへ異動することになったときは不安もありましたが、先輩方の温かいサポートのおかげで、今では「自分にはここが一番合っている」と心から思えます。

デイサービスの1日は、送迎から始まり、入浴、食事、午後の体操やレクリエーションと目まぐるしく過ぎていきます。日々のレクリエーションには特に力を入れており、工作やボールを使ったゲーム、時には今時の曲を取り入れた合唱など、片麻痺の方なども含め全員が平等に楽しめるよう工夫を重ねています。

先日は、1週間かけてお客様全員を初詣にお連れしました。人手が限られる中で、1週間丸々続けるのは大変でしたが、「行けて良かった。今年一年元気に過ごせそう」と喜ぶお客様の笑顔を見ると、苦勞も吹き飛びます。お風呂を嫌がってい

た方が、「気持ち良かったわ」ときっぱりしたお顔を見せてくれたときも、大きなやりがいを感じる瞬間です。

私たちの職場は個性豊かで明るいスタッフたちがしつかりと連携し、フォローし合える素晴らしい環境です。老朽化していた機械浴やシャワーなどの設備も新しくしていただいたおかげで、より安心してサービスを提供できるようになりました。

私自身、働きながら実務者研修を受け、現在は介護福祉士や社会福祉主事、さらにその先の社会福祉士の取得も視野に入られて勉強中です。

これからもスキルアップを続けながら、スタッフ全員で「目指せ稼働率100%」を合言葉に、「デイサービスセンターちとせに行きたいけれど予約が取れない」と言っていただけのような、魅力あふれるデイサービスを作っていきたいです。



ケアハウスこまち 墨田館



介護福祉士
池内 香奈子

**「帰りたくなる場所」でありたい。
食育・地域交流で広がる
ケアハウスの可能性**

以前は商社の事務職など全く違う畑にいましたが、子育てを経て「人が好き」という想いから福祉の世界に飛び込みました。

2017年（平成29年）のケアハウス墨田館オープン当初から勤務しており、現在は施設長と共に事務から現場のケア、相談員業務まで幅広く携わっています。毎日が発見の連続で、この仕事はまさに私の天職だと感じています。

当施設は定員20名と小規模ならではの家族のような、アットホームさが魅力です。特に力を入れているのが食育です。墨田区の取り組みとも連携し、温かく栄養のある食事を提供することで、入院などで体力が落ちてしまった方が劇的に回復される姿を何度も目にしてきました。「早く墨田館に帰りたい」と言っていただけのこと、私たちの一番の喜びです。

忘れられない出来事があります。あるお客様がご病気の影響で金銭トラブルを起こし、退去の話が出たことがありまし



た。しかし、本来のお人柄を知る私は「一旦任せてほしい」と申し出て、通院同行や金銭管理のサポートを徹底しました。その結果、症状は安定し、今ではとても穏やかにここで暮らしていらつやいます。職員の諦めない関わり方一つで、その方の人生が良い方向に変わるのでと痛感しました。

地域ボランティアの方々との交流や、隅田川の火花を一望できる屋上庭園など、ここにはたくさん笑顔の種があります。屋上水耕栽培で育てた野菜を皆で料理したり、地域の方を招いてヨガや書道教室などイベントを行ったりと、地域に開かれた施設づくりも進めていますし、ゆくゆくは子ども食堂なども開き、多世代が交流できる場所にしたという夢もあります。

もちろん人材育成など課題がないわけではありませんが、人生の先輩であるお客様からいただいたパワーを、より良いケアとしてお返ししていく。「一期一会」を大切に、お客様にも働く仲間にとっても居心地の良い温かい居場所を作っていきたいと思っています。

日本医療福祉グループが目指す「食」の在り方



日本給食サービス株式会社

代表取締役

山本 憲司

HPはこちら



「介護現場における「食」のジレンマ

私が日本医療福祉グループの給食事業に携わるようになってから3年目を迎えました。就任当初から変わらぬ想いがあります。それは、「施設における食事は、単なる栄養補給であってはならない」ということです。

高齢者施設の食事には、どうしても避けて通れない制約が存在します。一つは「安全性」です。嚥下機能が低下されたお客様にとって、誤嚥は命に関わる重大な事故につながりかねないため、食材を細かく刻んだり、ペースト状にしたりといった加工が必要になり、安全を追求

すればするほど、食事が「形のないもの」へと近づいていきます。

もう一つは「栄養管理」です。塩分制限、カロリー制限、カリウムの調整など、健康維持のために守らなければならない基準があります。保健所の指導も厳格です。当然のことではありますが、薄味で、彩りよりも数値を優先せざるを得ない場面も多々あります。

さらに、昨今の物価高騰と人手不足が追い打ちをかけます。食材の質を落とすか、人件費を削るかという選択を迫られます。いわゆる「安からう悪からう」のスパイラルです。日々の食事は、こうした厳しいルールとコストの制約の中で提供されています。しかし、人生の晩年を

過ごされる場所で、安全だが味気ない食事だけが続くとしたら、それはあまりにも寂しいことではないでしょうか。

「日常」と「非日常」のメリハリ

私たちが方針として掲げているのが、日常の管理された食事と、非日常の喜びある食事のメリハリをつけることです。日々の食事については、健康管理の側面から栄養士の管理下でルールを遵守しますが、私たちは月に数回、サプライズを用意することにしました。

その一つが、月に2回実施しているご当地グルメ企画です。47都道府県の郷土料理を本格的に再現し、ポスターを掲示して雰囲気盛り上げます。施設に入ってしまったお客様は、もう二度と外の味を楽しめないかもしれない。だからこそ、「今日は大分県の料理ですよ」と、施設の中にながらにして、食事を通じて旅をするような感覚を味わっていただきたい。

また、行事食においても妥協はし

ません。例えば土用の丑の日には鰻丼を提供したり、今年のクリスマス会では、ある施設でシャトレゼのケーキをご用意しました。「施設の



七夕の献立



土用の丑の日には鰻丼を提供

食事だから安価や手づくりのものでいい」という甘えを捨て、施設の外と同じ、あるいはそれ以上の驚きと本物を提供したいと考えています。お正月の重箱おせちもそうです。蓋を開けた瞬間の「わあっ」という歓声、それが私たちの原動力です。



元日の昼食は重箱に入れたおせち料理です

命の根幹である「お米」へのこだわり

食事のクオリティを底上げするために、私が最も力を入れたのが「お米」です。コスト削減を優先すると質の低いお米を使用せざるを得なく、しかも高齢者施設では水を多くして柔らかく炊くため、悪いお米を使うと、まるで糊ののような食感に

なってしまう。これでは、どんなにおかずを工夫しても食事が苦痛になります。

私たちは千葉県の米農家と直接契約を結び、年間40トンのお米を確保しています。この取り組みは、左理事長の「お客様の口に入るものに責任を持ちたい」「お米を自給自足できる体制を整えたい」という想いから始まりました。やわらかく炊いてもお米本来の甘みと旨味をしっかりと感じられる、非常に美味しいお米です。また、昨年の秋の収穫時には左理事長自らがコンバインを操縦し、稲刈りを行いました。この行動には、左理事長の食への責任に対する強い意志が込められています。実はこのお米、『いきいき暮らし』



担々風味ラーメンと餃子のセットを出すことも

という名称で商標登録も行っており、面会に来られたご家族様にも販売しています。「お父さん、お母さんが毎日食べているのは、この美味しいお米なんですよ」と胸を張って言えること。それがご家族様の安心感につながり、ひいては施設への信頼にもつながると信じています。

明るい現場が「美味しい」を作る

私たちの現場は、スタッフが驚くほど明るいです。現在、多くの外国人技能実習生も働いていますが、日本人スタッフと同じように大切にし、教育し、家族のように接しています。彼らは非常に意識が高く、エネルギーが豊富です。

「こんな料理を出したら喜ばれるのでは？」と、現場から自発的にアイデアが出てくることも珍しくありません。作り手が嫌々作っている料理と、楽しみながら心を込めて作っている料理。食べる人には、その違いが必ず伝わります。だからこそ、私はスタッフが笑顔で働ける環境づくりを何よりも大切にしています。

私たちはこれからも挑戦し続けます。「今日のご飯が待ち遠しい」「ここに入って良かった」。そう言っているだけで、安全性と美味しさを追求しながら、一食一食に魂を込めてまいります。

食を通じて、お客様の毎日に彩りと笑顔をお届けすること。それが、私たちの揺るぎない使命です。



お寿司を食べてニコリ

「諦めない」の実現が支え、 一人ひとりの人生を豊かに



医療法人社団 敬徳会

施設サービス部部长

永野 慎一

HPはこちら



私たち医療法人社団敬徳会は、
本年設立30周年を迎えることが
できました。これもひとえに地域の皆
様、お客様とそのご家族、そして
日々の業務に真摯に向き合う職員
皆様の支えがあつてこそです。敬徳
会の部長として、また現場を知る一
人の介護福祉士として、改めて深く

感謝申し上げます。

本日は、私たちの原点である法
人理念「一人ひとりの人生を豊か
に」という言葉の意味を再確認し、
私たちが地域でどのような役割を果
たし、どのような未来を描いている
のかをお伝えしたいと思います。

敬徳会が大切に 「3つの諦めない」

私たちが設立当初から掲げている
理念の中に、「3つの諦めない」とい
うものがあります。「食べる喜びを諦
めない」「旅行する喜びを諦めない」
「社会とのつながりを諦めない」。こ
れは単なるスローガンではありません。
病気や障害があつても、その人
らしく輝き続けるための約束です。

現場でケアにあたる私たち介護福
祉士は、日々お客様の「こうありた
い」という声に耳を傾けています。「い
つまでも自宅で暮らしたい」「もう
一度、自分の足で歩きたい」。そんな
願いに対し、私たちは「無理です」
と答えるのではなく、「どうしたら
できるか」を共に考え、実現に向け
たサポートを全力で行う組織であり
たいと考えています。

切れ目のない支援体制 !! ご自宅から施設まで

敬徳会の最大の強みは、医療・
介護・保育が連携し、ご自宅での
生活から施設入所までを切れ目な
く支える体制にあります。まず、
住み慣れたご自宅での生活を支える
ために、私たちは「訪問」と「通所」
のサービスを充実させています。

『介護老人保健施設のぞみ』の「訪
問リハビリテーション」では、ご自
宅をリハビリ室と捉え、生活環境に
即した実践的な訓練を行います。
また、「訪問看護ステーション」では、
医療処置や看取りまで対応し、最
期まで自宅で過ごしたいという想い

に寄り添います。

「通所（通う）」サービスにおい
ては、目的別の利用が可能です。身
体機能の回復を目指す「通所リハビ
リテーション（デイケア）」、短時間
で集中してリハビリを行う「介護予
防半日通所リハビリテーション」、そ
して生きがいづくりや仲間との交流
を重視した『保育・介護複合施設
きわみ』の「きわみデイサービス」。
それぞれのニーズに合わせた場所
で、心身の活性化を図っています。

また、在宅生活が困難になったと
きや、集中したりハビリが必要とな
きには、入所サービスである「介護
老人保健施設」が皆様を支えます。
ここは終の棲家ではなく、在宅復帰
を目指すための通過点です。「昨日
より今日、今日より明日が楽しみ
になる」、そんな希望を持っていた
だきながら、多職種協働で在宅復
帰を支援します。

多世代が交流する 新しいケアの形

さらに特筆すべきは、『保育・介
護複合施設きわみ』の存在です。こ



ここでは、デイサービスに通う高齢者の方々と、保育園に通う子どもたちが同じ屋根の下で過ごしています。

子どもたちは高齢者から優しくや知恵を学び、高齢者は子どもたちから元氣と笑顔をもらおう。この世代間交流こそが、人が人として健やかに生きるための原動力となります。きわみ保育園での食育活動や、畑での野菜づくりを通じた「農福連携」の取り組みも、地域に根差した福祉の新しい形です。

地域と共に歩む未来へ

敬徳会は現状に満足することなく、常に進化を目指しています。社会福祉法人千歳会との連携、訪問歯科、給食サービスなど、介護の枠を超えた社会福祉全体の充実を図り、地域のセーフティネットとしての役割を強化してまいります。

行政の皆様におかれましては、地域包括ケアシステムの構築において、私たちが担う在宅支援と自立支援の機能をぜひご活用いただきたく存じます。そして職員の皆さん、私た

ちは単にサービスを提供するだけでなく、お客様の「人生の伴走者」です。一人ひとりがプロフェッショナルとして成長し、チーム敬徳会として地域社会に貢献してまいります。

「いつまでも今ままでおりの生活をしながら生きていきたい」。その想いを実現するために、私たちはこれからもお客様の尊厳を守り、ご家族や地域の皆様と手を取り合って歩んでまいります。

「一人ひとりの人生を豊かに」。この理念を胸に、次の30年、その先の未来へ向かって、共に新しい物語を紡いでいきます。今後とも、医療法人社団敬徳会への変わらぬご支援とご協力を心よりお願い申し上げます。



「食べる喜び」を最期まで諦めない！ 訪問歯科診療の現場から



医療法人社団 活生会
安寿歯科四街道院

歯科医師

高橋 美奈子

HPIはこちら



嚥下^{えんげ}障害と誤嚥^{ごえん}を 見える化する 内視鏡検査の現場

「最近、食事中にむせるようになって」「食事が進まない」「原因不明の発熱が続く」など、ケアマネさんやご家族からこのような相談を受けることが、介入のきっかけとなるケースが多くあります。これらは嚥下障害や、それが引き起こす誤嚥性肺炎のサインかもしれません。しかし、怖いのはむせない誤嚥（不顕性誤嚥）です。

ご本人も周囲も気づかないまま、食べ物や唾液が気管に入り込んでしまっていることがあります。そこで

私たちが日々向き合っているのは、通院が困難な高齢者の方々や、障がいをお持ちで歯科医院への通院が難しい方々です。年齢層は80代の方が中心ですが、脳梗塞の後遺症などで50代といった若い世代の方のご自宅や施設へ伺うことも少なくありません。

私がこの訪問診療の世界に携わって約15年になりますが、現場で最も痛感するのは「口から食べること」がいかに生きる意欲に直結しているか、ということ。今回は、私たちが力を入れている嚥下内視鏡検査（VE）と、そこから広がる「食の支援」についてお話ししたいと思います。

私たちが活用しているのが、鼻から挿入する極細の内視鏡です。直径わずか3mm程度の非常に細いファイバーで、これを鼻から喉に入れ、着色した水やゼリーを飲み込んでいただく様子をモニターで観察します。

実際に映像を見ると、喉の奥（喉頭蓋のあたり）に痰や食べ物の残留物がびっしりと張り付いているのが見えることがあります。飲み込んだつもりでも、実際には喉に残っています。それが気管に垂れ込んでいます。

この映像をご家族や施設の方と一緒に見ることで、「ああ、これでは危ないですね」「食形態を変える必要がありますね」と、現状を正しく共有することができます。百聞は一見にしかず、なのです。



飲み込む力を取り戻す リハビリテーションの 実践

訪問歯科ではできることが限られるのでは？と思われることもありませんが、今の機材は驚くほど進化しています。私たちはワゴンに機材を載せて移動しますが、そこにはレントゲン撮影機、歯を削る機械、バキューム（吸引機）など、治療に必要な一式がコンパクトに収まっています。虫歯の治療はもちろん、その場で入れ歯の調整や型取りを行い、修理することも可能です。

お口のトラブルのほとんどは、ベッドサイドで完結できると言っても過言ではありません。検査や治療だけで終わりではありません。飲み込む機能が低下している方には、リハビリテーションを行います。例えば、凍らせた綿棒で喉を刺激して飲み込み反射を促すアイスマッサージや、舌の筋力トレーニングなどです。

また、意外に思われるかもしれませんが、カラオケも非常に良い予防法です。発声することで声帯がしっ

かり閉じるようになれば、誤嚥のリスクを下げることができます。「歌うこと」が命を守るトレーニングになるのです。

特に印象深いのは、胃ろうを造設されている方への支援です。口から食べるのは難しいと判断された方でも、お楽しみの範囲で、ほんのひとさじのゼリーやプリン、時にはお好きだったお寿司などを味わっていたことがありません。もちろんリスク管理は徹底した上で、ご家族の同意のもと行いますが、そのときのお顔は本当に輝いています。

中には、リハビリを重ねて胃ろうを外し、再び口から食事を摂れるまで回復された方もいらっしゃいました。その瞬間に立ち会えることは、私たちにとっても何よりの喜びであり、人生が変わる瞬間でもあります。

多職種連携で支える 訪問歯科診療

訪問歯科診療は、私たち歯科医師や衛生士だけで完結するものではありません。施設スタッフさんが食事の様子を観察するミールラウンドで

姿勢や食形態の提案をしたり、ケアマネさんと情報を共有したりと、多職種との連携が不可欠です。

特に、お口の中の汚れは誤嚥性肺炎の大きなリスク因子です。ご自身で歯磨きができない方に対しては、私たちが定期的に伺い、専門的な口腔ケアで汚れを取り除きます。入口である口の中を清潔に保つことが、全身の健康を守る第一歩なのです。

「食べることは生きること」。もし、ご家族や身近な方で、お食事のことでお困りのことがあれば、ぜひケアマネさんやかかりつけ医、そして私たちに相談ください。最後までその人らしく、美味しく食べていただくために、私たちは今日もお客様のもとへ伺います。



令和8年度入職式を実施 新たに19名が仲間

4月6日、千歳会および敬徳会の令和8年度入職式を特別養護老人ホームちとせ稲毛の地域交流ホールにて執り行いました。本年度は、千歳会が5施設で15名、敬徳会が4名と、グループ全体で過去最大となる19名が新たな仲間として加わりました。

式は、左理事長の挨拶で開幕。左理事長は、まず数ある企業の中から千歳会を選び、入社してくれたことへの感謝を述べたうえで、「20代のうちは、『人の3倍考え、3倍働き、3分の1寝る』くらいの気概で圧倒的に努力することが、将来の選択肢を広げ、人生の成功につながる。会社を自己実現のためのツールとして活用し、自身の人生を豊かにしてほしい」と新入職員たちへエールを送りました。

続いて新入職員紹介が行われ、19名を代表して、ちとせ小町に所属となる長谷川拓紀さんが謝辞を述べました。温かい歓迎への感謝と、多様な同期と共に



に企業理念を胸に刻み、先輩の指導のもとで早期に地域貢献できる人材へと成長していく決意が語られました。

また、閉会後には左理事長による講和が行われ、会社の方向性や仕事に対する心構え、目指すべき姿についてのお話がありました。

改めて19名の皆さん、ご入職おめでとうございます！

左理事長が(一社)日本介護協会理事長に再任 介護業界の祭典「介護甲子園」が再始動！

日本一の介護事業所を決める「介護甲子園」を主催する(一社)日本介護協会(東京都中央区)の理事長に、初代理事長を務めていた当法人の左理事長が復帰されました。

介護甲子園は、現場の工夫や成功事例を共有して介護業界の魅力を発信、人材不足の解消につなげることを目的とし、全国からエントリーされた介護事業所から選ばれた優秀事業所が自身の取り組みや思いを自由にプレゼンし、最も多くの「学び」や「気づき」を得られた事業所を選出する大会です。

2012年の初開催以降、年1回のペースで大会を重ね、2023年の第12回大会では、立ち上げ当初からの目標であった「本物の甲子園球場(阪神甲子園球場)での開催」をついに実現、全国から約8,887の事業所が参加する盛況となりました。

順調に規模を拡大するなか、左理事長は2019年末の第9回終了後、若い世代にバトンタッチして理事長を退任。しかし、直後に新型コロナウイルス感染症が拡大。規模縮小やオンライン開催など運営の見直しを余儀なくされ、大規模な集客ノウハウがうまく継承されず、

2024年以降は開催がストップしています。

左理事長が再び同協会の舵取りを担うことになったのは、介護人材の不足が進む中、「全国の事業者が一つの目標に向かって努力し、多くの介護職が集い、学ぶ場は絶対に必要。より多くの人々に介護を深く理解してもらうためにも、介護甲子園をもう一度立ち上げ、業界全体を元気にしよう」という強い思いがあるからです。

次の大会は原点に立ち返り、当初の会場だった東京・日比谷公会堂で開催予定。同館はリニューアルに伴う休館中のため、改修工事終了後の2028年ないし2029年の開催を見込んでいます。その間は介護甲子園を知らない若い世代や経験の浅い職員に向け、メディアやSNSなどを通じてイベントの存在や参加意義を若い世代や業界内外に広く伝え、業界全体でエントリーへの機運を高めていく方針です。



重度心身障害児に特化したデイサービス

『ガーデンちとせ三山園』がオープン！

4月1日、特別養護老人ホーム三山園の敷地内に、重度心身障害児に特化した児童発達支援・放課後等デイサービス『ガーデンちとせ三山園』が新しくオープンいたしました。

本施設は、医療的ケアや重度の障害がある子どもたちと、そのご家族をサポートするために開設されました。老人ホーム内に放課後等デイサービス施設が常設されるのは千葉県内に例がなく、重度心身障害児に特化した同サービス施設も県内で初となります。

大きな特徴として、①ご自宅での入浴が難しい方でも安心してご利用いただける、機械浴槽による入浴サービス ②看護師・理学療法士（PT）が常駐し一人ひとりの状態に合わせた適切なリハビリテーションを提供 ③車いすでの送迎対応を用意しています。

安全できめ細やかなサポートを提供するため、定員は毎日6名の少人数制となり、平日は午後からの受け入れ、祝祭日は1日を通してのご利用が可能となっております。ご家族のレスパイト（休息）ケアとしてもお役立ていただけます。

開設に先立ち3月16日に開所式



施設概要

- 施設名：児童発達支援・放課後等デイサービス『ガーデンちとせ三山園』
- 開設日：2026年4月1日
- 場所：特別養護老人ホーム三山園 敷地内
- 定員：6名（平日午後／祝祭日1日 利用可）



2026.3.26 千葉日報より

が実施され、左理事長からの挨拶では、責任をもって高齢・障害の共生型サービスを行っていく旨を熱く語られました。

アスサキ 制作スタッフ募集!

いつもアスサキを愛読いただき、ありがとうございます。「千歳会の魅力をアピールし、部署間のコミュニケーションを活性化する」という目的のもと、スタッフは日々制作しておりますが、さらに充実した内容をお届けするために、一緒にアスサキを作ってくれるライター、制作スタッフを各施設内から広く募集いたします。

文章を書くのが好きな方、他部署の人と関わってみたい方、新しいことにチャレンジしたい方など、少しでも興味がある方は大歓迎です。

募集内容

（興味のある分野だけでの参加もOK!）

- ライター、インタビュアー
社員インタビューの実施、イベントレポートの作成、企画記事の執筆など。
- 企画
「こんな記事が読みたい!」という企画立案、全体の構成など。
- カメラマン、デザイナー
インタビューやイベントでの写真撮影、簡単な画像作成やデザインなど。

こんな方に おすすめ!

「文章を書くことや、情報をまとめることが好きな方」「普段関わらない他部署の人と交流し、社内のネットワークを広げたい方」「広報、企画、編集などの新しいスキルを身につけたい方」「自社の魅力をもっといろんな人に知ってほしい!という熱意のある方」。経験のある方はもちろん、経験のない方もOK!しっかりサポートします。まずは「どんなことをするのか聞いてみたい」というご相談だけでも大歓迎です!少しでもご興味をお持ちいただけましたら、お気軽にお問い合わせください。

連絡先
090-3319-5812
(富樫)

日本医療福祉グループ 5～9月スケジュール(予定)

● 特別養護老人ホームちとせ稲毛

5月	母の日スイーツビュッフェ しょうぶ湯
6月	父の日居酒屋 家族会
7月	流しそうめん 夕涼み会
8月	納涼夏祭り
9月	敬老祝賀会

● 特別養護老人ホームちとせ北本

5月23日(土)	深井地区作品展示会(北部公民館)
6月6日(土)	北本カレーフェスティバル出店
7日(日)	(北本総合公園)
6月28日(日)	こども食堂
8月	深井地区祭り(北部公民館)
9月	敬老会

● 特別養護老人ホームちとせ小町

5月	菖蒲湯 こいのぼり見学
6月	家族会
7月	七夕飾り 避難訓練(日中想定)
8月	花火イベント
9月	敬老会

● 特別養護老人ホーム三山園

5月	子どもの日 (放課後等DS児童と一緒に)
7月	花火大会 七夕
8月	ピアノ演奏会
9月	プロレス大会 敬老会

● ケアハウスちとせ

5月	母の日喫茶 菖蒲湯
6月	ジャガイモ収穫 グランドゴルフ大会(王子台小学校) 父の日喫茶
7月	全体懇談会: 四半期毎に開催する入居者懇談会 七夕飾り ジャガイモ収穫祭り ひまわり見学(佐倉ふるさと広場)
8月	スイカ割、花火大会 スマホ教室
9月	敬老会

● ケアハウスこまち墨田館

5月	菖蒲湯 母の日
6月	菖蒲を見に行きます(小岩菖蒲園) 父の日
7月	七夕祭り 隅田川花火大会鑑賞
8月	隅田川灯籠流し見物 (墨田区役所墨田川前) スイカ割り
9月	敬老会 納涼祭

● 介護旅行

奇数月にちとせ北本・こまち墨田館、偶数月に千葉エリアの施設で実施。お客様の声を大切にしつつ企画・実施しているため、最新情報は職員にお問い合わせください。

● 日本給食サービス株式会社

全施設を対象に、季節行事食やご当地グルメを提供。そのほか、6月のちとせ北本バザー、8月の夏まつり、9月の三山園プロレスでは屋台を実施予定。

社会福祉法人千歳会 法人本部 特別養護老人ホーム ちとせ稲毛

〒263-0012
千葉県千葉市稲毛区萩台町50-1
Tel: 043-445-7840 Fax: 043-445-7832
Mail: info@1000.or.jp (法人本部)
Mail: info-inage@1000.or.jp (ちとせ稲毛)

社会福祉法人千歳会 法人本部 分室

〒103-0002
東京都中央区日本橋馬喰町2-4-5-3F
Tel: 03-6908-7777 Fax: 03-5651-7667
Mail: info@1000.or.jp

特別養護老人ホーム ちとせ北本 居宅介護支援事業所 ちとせ北本

〒364-0001
埼玉県北本市深井3-25-1
Tel: 048-579-5110 Fax: 048-579-5114
Mail: info-kitamoto@1000.or.jp

特別養護老人ホーム ちとせ小町 デイサービスセンター ちとせ小町

〒285-0043
千葉県佐倉市大蛇町215-7
Tel: 043-312-5111 Fax: 043-312-5112
Mail: info-komachi@1000.or.jp

ケアハウス ちとせ 訪問介護ステーション ちとせ 居宅介護支援センター ちとせ デイサービスセンター ちとせ

〒285-0836
千葉県佐倉市生谷75-10
Tel: 043-464-1577 Fax: 043-460-5776
Mail: info-chitose@1000.or.jp

ケアハウス こまち墨田館

〒131-0045
東京都墨田区押上3-61-4
Tel: 03-6657-5690 Fax: 03-6657-5691
Mail: info-sumida@1000.or.jp

特別養護老人ホーム 三山園 デイサービスセンター 三山園 ガーデンちとせ三山園

〒274-0072
千葉県船橋市三山2-3-2
Tel: 047-476-2885 (特養・ショートステイ)
Tel: 047-493-2208 (デイサービス)
Tel: 047-493-2208 (放課後等デイサービス)
Fax: 047-474-3873
Mail: info-miyamaen@1000.or.jp

居宅介護支援センター みはま

〒261-0004
千葉県千葉市美浜区高洲4-1-9 都栄ビル2F
Tel: 043-307-4711 Fax: 043-307-4712